



ロマン・ロラン ★

ジャン・クリストフ I

豊島 與志雄 譯

世界文學大系

筑摩書房 版

世界文学大系 47

ロマン・ロラン ★

昭和33年4月15日発行

定価 450 円

訳 者 豊 島 與 志 雄

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 山 元 正 宜

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768 電話(29)局 7651

目次

ジャン・クリストフ

豊島與志雄訳 5

第一卷 曙

第二卷 朝

第三卷 青年

第四卷 反抗

第五卷 広場の市

第六卷 アントアネット

解説

渡邊 一夫 483

裝
幀
庫
田
發

ロ
マ
ン
・
ロ
ラ
ン
★

いづれの国の人たるを問わず、
苦しみ、闘い、遂には勝つべき、
あらゆる自由なる魂に、捧ぐ。

ロマン・ロラン

ジャン・クリストフ

第一卷
曙

昼告ぐる曙の色ほのかにて、
汝が魂は身内に限れる時……

（神曲、煉獄の巻、第九章）

うち湿りたる濃き霧の
薄らぎそめて、日の光
おぼろに透し来るとくに……

(神曲、煉獄の巻、第十七章)

河の水音は家の後ろに高まっている。雨は朝から一日窓に降りそそいでいる。窓ガラスのひびのはいった片隅には、水の滴りが流れている。昼間の黄ばんだ明るみが消えていって、室内はなま暖かくどんよりとしている。

赤児は揺籃ゆらんの中でうごめいている。老人は戸口に木靴を脱ぎすてはいって来たが、歩く拍ひょう

子に床板がきしったので、赤児はむずかりだす母親は寝台の外に身をのり出して、それをすかそうとする。祖父は赤児が夜の暗がりを恐がるといけないと思つて、手探りでランプをつけるその光で、祖父ジャン・ミシェル老人の赤ら顔や、硬い白鬚や、氣むずかしい様子や、鋭い眼付などが、照らしだされる。老人は揺籃の側に寄つてゆく。その外套は雨に濡れた匂いがしている。彼は大きな青い上靴を引きずるようにして足を運ぶ。ルイザは近寄つてはいけなさと彼に手真似をする。彼女は白いといつてもいいほどの金髪で、顔立ちはやつていて、羊のようなやさしい顔には赤痣があり、唇は蒼ざめて厚ぼつたく、めつたに合わざらず、浮べる微笑もおおずおとしている。彼女は赤児を見守っている——ごく青いほんやりした眼で、その瞳はきわめて小さいが至つてもものやさしい。

赤児は眼を覺まして泣く。その定かならぬ目差しは乱される。何という恐ろしさだろう！深い闇、ランプの荒々しい光、渾沌のなかから出て来たばかりの頭脳の幻覚、周囲にこめている息苦しいざわめく夜、底知れぬ影、その影の中から、まぶしい光線のように強く浮びだしてくる、強烈な感覚が、苦惱が、幻影が、こちらを覗きこんでるそれらの巨大な顔が、自分を貫き自分のうちにはいりこむ意味の分らないそれらの眼が！……赤児は声を立てる力もない。彼は身動きもせず、眼を見開き、口を開け、喉の奥で息をしながら、恐怖のために釘付けにされる。そのふくれた大きな顔には皺が寄つて、

痛ましい奇怪な洪面になる。顔と両手との皮膚は、栗色で紫がかったおり、黄っぽい斑点がついている……。

「いやはや、なんて醜い奴だ！」と老人は思いこんで言った。

彼はランプをテーブルの上に置きに行った。ルイザは叱られた小娘のように口を尖らしたジャン・ミシェルは横目で彼女を眺めて、そして笑った。

「きれいな奴だといってもらおうとは、お前も望んでやすまい。お前にだつてきれいだとは思えまい。だがいいさ、お前のせいじゃない。赤ん坊でものはみんなこんなものだ」

子供はランプの焰と老人の目差しとに驚き、ただ惘然として身動きもしなかったが、やがて声を立て始めた。おそらく彼は母親の眼の中に苦情をいうがよいと勧めるような愛撫を、本能的に感じたのであらう。彼女は彼の方へ両腕を差し出して言った。

「私にかして下さい」

老人はいつもの癖で、まず理窟を並べ立てた。「泣くからといって子供のいうままになつてはいけない。勝手に泣かせることだ」

しかし彼は子供の所へ来て、それを抱き上げ、そしてつぶやいた。

「こんな醜い奴は見たことがない」

ルイザはわなわなしてる手で子供を受け取り、胸深く抱いた。彼女はきまり悪げなまた喜びに堪えないような微笑を浮べて、子供を見守った。

「おう、かわいそうに」と彼女は大層恥ずかし

そうにして言った、「坊やはなんて醜いでしょう、なんて醜いでしょう、ほんとにかわいいこと！」

ジャン・ミシェルは暖炉の側に戻った。彼は不機嫌な様子で、火をかき立て始めた。しかしその顔に装って陰鬱なしかつめらしさは、軽い微笑の影で裏切られていた。

「お前」と彼は言った、「ねえ、昔にしちゃいけない。まだまだこれから顔付は変わるものだ。それに、醜いだってそれが何だ？ この見に求むることはただ一つきりだ、立派な者になつてくれということだ」

子供は母親の暖かい身体に触って心が和らいでいた。息を押えて食べるように乳を吸ってる音が聞えていた。ジャン・ミシェルは椅子の上で軽く身をそらして、おごそかにくり返した。

「正直な男ほど立派なものはない」
彼はちよつと黙って、その思想を布衍したものでどうか考えた。しかしそれ以上いふべきことを見出さなかった。そしてしばらく黙った後、激した調子で言いだした。

「良人が居ないとは、どうしたことだ？」

「芝居に行ってるのでしょうか」とルイザはおずおず言った。「下稽古がありますから」

「芝居小屋はしまっている。わしは今その前を通って来たんだ。それもまたあいつの嘘だ」

「いいえ、あの人がかりをいつもおとがめなすってはいけません。私の思い違いかも知れませんが、では出稽古に手間取ってるのでしょうか」

「もう帰って来られるはずだ」と老人は満足しないで言った。

彼はちよつと躊躇して、それから少し気恥ずかしげに声を低めて尋ねた。

「あいつは……また……？」

「いいえ、お父様、いいえ」とルイザはせきこんで言った。

老人は彼女を眺めた。彼女はその前に顔をそらした。

「本当じゃない、お前は嘘をついてるな」

彼女は黙って涙を流した。

「ああ！」と老人は大声を出しながら、暖炉を一つ蹴った。火掻棒が落ちて大きな音を立てた。母親と子供とは震え上った。

「お父様、どうぞ」とルイザは言った。「坊やが泣き出しますから」

子供は泣き声を立てたものかそれともやはり静かにしているかと、しばらく躊躇した。しかし両方を同時にすることができないので、やはり静かにした。

ジャン・ミシェルは腹立ちまぎれに一層太い声で言い続けた。

「わしはどんなことをした報いで、あんな酔漢を息子に持ったのか！ わしのような生活をし、万事に不自由な目を忍んだのも、むだな骨折りだったのか……！ だがお前は、お前はあいつを制することができないというのか。なぜかってそりやお前の役目じゃないか。お前があいつを家に引き留めさえしたら……」

ルイザはなお激しく涙を流していた。

「この上私を叱って下さいますな、私もうたいへん不仕合せですもの。私はできるだけのことにはしました。ああ一人でいるとどんなに恐ろしい思いをしていますか、それを察して下さいましたら！ いつでも階段にあの人の足音が聞えるような気がします。すると私は扉が開くのを待ちます。まああの人はどんな様子で出てくるかしらと考えます。……それを思ってみるだけでも気がふさいできます」

彼女はすすり泣きに身を慄わしていた。老人は気をもんだ。彼は彼女の傍にやって来、その震えてる両肩に乱れた蒲団をかけてやり、大きな手でその頭を撫でてやった。

「さあ、さあ、心配することはない。わしがついでる」

彼女は子供のことを思つてむりに気を鎮め、そしてほえももうとした。

「あんなことを申ししたのは、私が悪うございました」

老人は頭をうち振りながら彼女を眺めた。

「かわいそうに、わしがお前にやった贈物は立派なものではなかった」

「私の方が悪いんです」と彼女はいった。「あの人は私みたいな者と結婚なさるのではありませんでした。自分のしたことを後悔なさっています」

「何を後悔しているって？」

「それはあなたがよくご存じでございましょう。私があの人になりましたのを、あなたご自身でも気を悪くしていられしやいました」

「もうそんな話をするもんじやない。なるほどわしは多少不満だった。あのような青年——こういつたって何もお前の気にさわりはすまい——わしが注意して育て上げた青年、優れた音楽家で、本當の芸術家で——全く彼は、お前のように貧乏で、身分が違い、何の技能もない者より、もっと他の女を選ぶこともできたはずだ。クラフト家の者が音楽家でもない娘と結婚するなんてことは、もう百年余りこの方例がないんだ！——それでも、お前もよく知っているとおり、わしはお前を怨んだこともないし、お前と識り合つてからはいつも好意を持っていた。それに、一度こうときまつてしまえば、もう後戻りはできない。あとはただ義務を尽すことばかりだ、正直に」

彼は元の席へ戻つて腰掛け、ちょっと間を置いて、それから、いつも自分の格言を口にする時のような厳めしさでいった。

「人生で第一のことは、己れの義務を尽すことだ」

彼は抗議を待ち受け、火の上に唾をした。それから、母親も子供もなら異論を持ち出さなかつたので、なお言葉を続けたく思った——が、口をつぐんだ。

＊

彼らはもう一言も口を利かなかつた。ジャン・ミシエルは暖炉の側で、ルイザは寢床に坐つて、二人とも悲しげに夢想していた。老人はああは言つたものの、息子の結婚のことをにが

にがしげに考えていた。ルイザの方も同じくそのことを考えていた、そして自ら非難すべき点は何もなかつたけれど、それでも気がとがめていた。

ジャン・ミシエルの子メルキオル・クラフトと結婚した時、彼女は女中であつた。でその結婚には誰も驚いたが、特に彼女自身が驚いた。クラフト家には財産はなかつたが、約半世紀前には老人が居を定めたそのライン河畔の小さな町では、かなり尊敬されてゐた。彼らは父子代々の音楽家で、その地方、ケルンとマンハイム間では、音楽家仲間にも名が知れ渡つてゐた。メルキオルは宮廷劇場のヴァイオリニストであつた。ジャン・ミシエルは近ごろまで大公爵の演奏会を指揮してゐた。でこの老人はメルキオルの結婚に深い屈辱を感じた。彼は息子に大きな希望をかけていて、自分自身ではなれなかつたけれども、息子の方は高名な人物にしたいと思つてゐた。ところがこの無謀な結婚は、その望みを打ち壊してしまつた。それで最初のうちは盛んにどなりたて、メルキオルとルイザとをのしり散らした。しかし根が正直な人だけに、嫁の気心をよく知つてくると、すぐに彼女を許してやつた。そして父親としての愛情をさえ心に抱くようになった。がその愛情はたいいてい冷たい素振りとなつて現われてゐた。

メルキオルが何に駆られてそういう結婚をしたのか、誰も了解することができなかった。——誰よりもメルキオル自身にわけが分らなかつた。たしかにルイザの美貌のせいではなかつた。

彼女は少しも人を惑わすような点を持つてはいなかつた。背が低く、蒼ざめて、虚弱だつた。ところがメルキオルとジャン・ミシエルとは二人とも、背が高く、でつぷりして、赤ら顔の、たくましい拳をし、よく食ひ、よく飲み、笑ひ事の好きな、騒ぎやの大男だつたので、彼女とおかしな対照をなしてゐた。彼女はまるで彼らに圧倒されてゐるかと思われた。誰も彼女へはほとんど注意を向けなかつたが、それでも彼女はなお一層隅っこに引つ込んでばかりいようとしてゐた。もしメルキオルがやさしい心を持つてゐるのだつたら、彼は他のあらゆる利益をうち捨ててルイザの純良な氣質を選んだのだとも、考えられないことはなかつた。しかし彼は最も浮薄な男だつた。で結局、かなりの好男子で、自分でもそれを知らないではなく、またごく見栄坊で、その上多少の才能もあり、金持の娘に眼をつけることもでき、また彼が自ら自慢してたように、中流市民の女弟子のどれかを夢中にならせることさえもできる——誰かいづくんぞ知らんやではあるが——という、彼のような一個の青年が、財産も教育も容色もない賤しい娘を、しかも向うからもちかけても来なかつた娘を、突然妻に選ぼうとは、全く賭事みたいな沙汰らしく見えるのであつた。

しかしメルキオルは、他人が期待してゐることやまた自分自らが期待してゐることは、常に反対のこゝろを行ふやうな類の男であつた。かかる人たちは目先のきかないわけではない——目先のきく者は二人前の分別があるそふだが……。

彼らは何事にも欺かれることがないと言言し、一定の目的の方へ自分の舟を確実に操って行けると高言している。しかし彼らは自分自身を勘定に入れていない、なぜなら自分自身を知らないから。いつも彼らにありがちなその空虚な瞬間には、彼らは舵を打ち棄てておく。そして物事は勝手に放任されると、主人の意に反することになり意地悪い楽しみを見出すものである。自由に解き放された舟は、真直ぐに暗礁を目がけて進んでゆく。かくて野心家のメルキオルは女中風情と結婚した。とはいえ、彼女と生涯の約を結んだ時、彼は酔っ払ってもいなければ、ぼんやりしてもいなかった。また彼は情熱の誘いをも感じてはいなかった。そんなものは非常に欠けていた。しかし吾々のうちには、情意以外の他の力が、感覚よりも他の力が、——普通の力がみな眠っている虚無の瞬間に主権を握るある神秘的な力が、恐らく存在しているのかも知れない。ある夕方、ライン河畔で、メルキオルがこの若い娘に近づき、葦の中で彼女の側に坐り——自ら理由も知らないで——彼女に婚約を与えた時、おずおずと彼を眺めてる彼女の沈んだ瞳の底で、彼はこの神秘的な力に遭遇したのであらう。

結婚するとすぐに、彼は自分のしたことに落胆したような様子をした。彼はそのことを憐れなルイザにもさらに隠さなかった。ルイザはいかにもつましやかに、彼に許しを求めた。彼は悪い男ではなかった、そして快く彼女を許してやった。しかしすぐその後で、友人らの間に交わったり、または金持の女弟子の家に行った

りすると、再び悔恨の念にとらえられた。女弟子などはもう軽侮の様子を見せていて、彼が鍵盤の上の指の置き方を正してやろうとして手で触つても、もはや身を震わすようなことはなかった。すると彼は陰鬱な顔付をして戻つて来た。ルイザはそれをひと目見て、またいつもの非難をよみ取って、つらい思いをした、あるいはまた彼は、居酒屋に立ち寄って遅くなることもあった。彼はそこで、自分自身に対する満足と他人に対する寛容とを汲み取った。そういう晩には、からから笑いながら戻つて来た。しかしそういう笑いはい、いつもの口には出さない考えや胸に蓄えてる怨恨よりも、ルイザには一層悲しく思われた。彼女は良人のそうしたふしだらに對して、自分にも多少責任があるように感じていた。そのふしだらなたびごとに、家の金が多くなると共に、良人の心に残つてる僅かな真面目さも次第に消えていった。メルキオルは身を持ち崩していった。たえずつとめて自分の平凡な才を磨くべき年頃に、彼はするすると坂を滑り落ちて顧みなかった。そして他人に地位を奪われていった。

しかしながら、麻のような髪の毛の一女中に彼を結びつけた不可知なる力にとっては、それが何の関係があろうぞ。彼はただ自分の役目を演じたのである。そして今や小さなジャン・クリストフが、運命の手に導かれて、この地上に足を踏み出してゐた。

すっかり夜になっていた。ジャン・ミシエル老人は暖炉の前で、昔や今の悲しいことどもを考へながらぼんやりしていたが、ルイザの聲ではっと我に返った。

「お父様、あの人はきつと遅くなるでしょう」と若い妻はやさしく言っていた。「もうお帰りをさいませ、道が遠うございますから」

「メルキオルが帰るまで待っていていよう」と老人は答えた。

「いいえ、どうぞ、いってくださいない方がよろしうございます」

「なぜ？」

老人は顔をあげて、じつと彼女を眺めた。

彼女は答へなかった。

彼は言った。

「お前は恐がつてゐるね。あいつにわしを逢わせたくないんだね」

「ええ、そうでございます。お逢いになれば事が面倒になるばかりでしょう。あなたはきつとお怒りなさいます。いやです。お願いですから！」

老人はため息をつき、立ち上り、そして言った。

「よしよし」

彼は彼女の側に行き、さらさらした髪で彼女の額を撫でた。そして何か用はないかと尋ね、ランプの火をねじ下げ、暗い室の中を椅子にぶつつかりながら出ていった。しかし階段を下り始めないうちに、息子が酔っ払って戻ってくることを頭に浮べた。彼は一段ごとに立ち止った。

息子が一人で帰って来たらどんなことになるだろうかと、いろいろ危険な場合を想像してみた。

寢床の中では、母親の側で、子供がまた動きだしていた。未知の苦悩が、己れの存在の奥底から湧き上ってきていた。彼は母親に身を堅く押しつけた。身体をねじまげ、拳を握りしめ、眉をしかめた。苦悩は力強く平然と、大きくなるばかりであった。その苦悩がどういふものであるか、またどこまでつものてゆくものか、彼には分らなかった。ただ非常に広大なものであり、決して終ることのないものであるように思われた。そして彼は悲しげに声を立てて泣きだした。母親はやさしい手で彼を撫でてやった。苦悩はもうずっと和らいでいた。しかし彼は泣き続けていた。自分の近くに、自分のうちに、その苦悩がいつもあるように感じていたからである。——大人が苦しむ時には、その苦しみの出処を知れば、それを減することが出来る。彼は思想の力によって、その苦しみを身体の一部分に封じこめる。そしてその部分はやがて回復されることもできれば、必要に応じては切り離されることも出来る。彼はその部分の範囲を定め、自分自身から隔離しておく。しかし子供の方は、そういうごまかしの手段を持たない。彼と苦しみとの最初の邂逅は、大人の場合よりもより悲壮でありより真正直である。自分自身の存在と同じように、苦しみも限らないもののようには思われる。苦しみは自分の胸の中にすみ、自分の心の中に腰を据え、自分の肉体を支配しているように感じられる。そしてまた実際その

とおりである。苦しみは彼の肉体をついばんだ後でなければ肉体から去らないだろう。

母親は子供を抱きしめながら、かわいい言葉をかけている。

「さあすんだよ、すんだよ、もう泣くんじゃありません。ねえ、いい児だからね……」

子供はなおとぎれとぎれに、訴えるように泣き続ける。その無意識な不恰好な憐れな肉の塊りは、自分に定められている労苦の一生を予感しているかのようである。そしてなにも彼を静めることはできない……。

サン・マルタンの鐘の音が、夜のうちに響き渡った。その音は莊重でゆるやかであった。雨に濡れた空気の中を、苔の上の足音のように伝わっていった。子供はすすり泣いていたが、びたりと声を止めた。豊かな乳が流れ込むように、美妙的な音楽が静かに彼のうちに流れ込んできた。夜は輝き渡り、空気はなごやかで暖かだった。子供の苦悩は消えてゆき、その心が笑い始めた。そして彼は我を忘れた大きい息を一つして、そのまま夢の中におちこんでいった。

三つの鐘が静かに鳴り続けて、明日の祭りを告げていた。ルイザも鐘の音に耳を傾けながら、過去の惨めなこともを思い浮べ、また傍に眠っているかわいい赤児の行末などをぼんやり考えふけた。彼女はもう数時間前から、けだるいがっかりした身を、寢床に横たえていたのである。手先や身体がほてっていて、重い羽根蒲団に押し潰される思いをし、暗闇のために悩まされ圧倒されるような気がしていた。しかししい

て身を動かそうとしなかった。彼女は子供の顔を眺めていた。暗い夜ではあったが、年寄じみた子供の顔立ちを見分けることができた。眠気が襲ってきて、頭の中にはいらだたしい幻が通りすぎた。メルキオルが扉を開ける音を耳にしたように思っ、胸がどきどきとした。時々河の音が、獣のはえ声のように、寂寞た中に高く響いてきた。ガラス窓は雨に打たれて、なお二三度音を立てた。鐘の音は次第にゆるやかになってゆき、ついに消えてしまった。そしてルイザは子供の側で眠りに入った。

そういう間、ジャン・ミシエル老人は、雨の中に、霧に鬚を濡らして、家の前で待っていた。惨めな息子の帰宅を待っていた。頭がたえず働いて、泥酔から起るいろんな悲しい出来事をあれこれと想像して止まなかったのである。実際そういう事が起ろうとは信じなかったけれども、もし息子が戻って来るのを見ないで帰ったら、その晩一睡もできないかも知れなかった。鐘の音を聞いて彼の心は非常に悲しくなっていた。空に終わった昔の希望を思い起したからである。こんな時刻に、この往来の中で、自分は今何をしているか、それを彼は心に浮べていた。そして恥ずかしさのあまり涙を流していた。

＊

月日の広漠たる波は徐々に展開してゆく。限りなき海の潮の干満のように、昼と夜とは永遠に変ることなく去来する。週と月とは流れ去ってはまた始まる。そして日々の連続は同じ一日

に似ている。

極みなき黙々たる日。それを印づけるものは、影と光との相等しい律動、また揺籃の底に夢みる遲鈍な存在の生命の律動——あるいは悲しいあるいは楽しいやむにやまれぬその欲望、それは昼と夜ともたらされながら、かえって自ら昼と夜とを招き出すかと思われるまでに、規則正しく波動する。

生命の振子は重々しく動いている。全存在はそのゆるやかな波動のうちに吞みこまれる。その他はみな夢にすぎない、うごめく畸形な夢の断片、偶然に舞い立つ原子の埃、人を笑わせあるいは恐れさせつつ過ぎて行くめまぐるしい旋風にすぎない。喧騒、揺らめく影、奇怪な形、苦惱、恐怖、哄笑、夢、種々の夢……すべてみな夢に過ぎない……。

——そしてその混沌の中には、彼にはほえみかける親しい眼の光母の身体から、乳にふくれた乳房から、彼の身体のうち伝わり渡る喜悅の波、彼のうちにあつて自然に積り太つてゆく力、その小さな子供の体内に閉じこめられてとどろき出す湧き立った大洋。かかる幼児の内部を読み分ける者は、影の中に埋もれたる幾多の世界を、しだいに形をそなえゆく幾多の星雲を、形成中の全宇宙を……そこに見出すであらう。幼児の存在には限界がない。彼は存在するすべてのものである……。

月は過ぎてゆく……。記憶の鳥が、一生の河

の流れから現われ始める。最初は、眼にもとまらぬ狭い小島で、水面とすれすれになつての巖である。それらのものの周囲には、夜が明けゆく薄ら明りの中に、静かな大きい水脈がずっと拡がってゆく。それからこんどは、金色の日の光を浴びた新しい小島が現われる。

魂の深淵から、ふしぎに明確な種々の形が湧き出てくる。単調な力強い波動をなしながら、永遠に同じ姿でくり返される無辺際の日の中には、あるいは飲むの顔をしあるいは悲しみの顔ををして、互に手をつなぎ合はしめる幾多の日の円い群が、浮び出してくる。しかしその鎖の環はたえず切れて、思ひ出は週や月……をまたぎ越して互につながり合う。

河……鐘……。思ひ出の届く限り遠くに——時の遠い曠野の中に、生涯のいかなる時代にもせよ——それらの奥深い親しい声は、常に歌っている……。

夜——うとうとと彼が眠る夜……。蒼ざめた明るみが窓ガラスをはの白く染めている……。河は音を立てている。その声は、寂寞の中に力強く高まつてくる。あらゆる存在の上に働きかける。あるいはそれらのものの眠りを和らげ、また河波の響きのままに自らもうとうととしてるかと思われる。あるいは喘みつこうとて狂い廻つて野獣のように、いらいだち咆哮する。その怒号が静まると、今度は限りなくやさしいささやき、銀の音色、澄み切った鈴の音のようなもの、子供の笑い声のようなもの、やさしい歌声、踊り舞う音楽。決して眠ることのない大い

なる母性の声！ その声は子供を揺する、彼より以前に存在したあらゆる時代の人々を、その生から死に至るまで、幾世紀の間も揺すってやうたがように。そして子供の思想の中にはいりこみ、その夢の中に沁みこみ、濃みなき諧調のマントで彼をくるんでやる。やがて彼がラインの河水に浴する水のほとりの小さな墓地に横たわる時も、そのマントはなお彼をくるんでくれるであらう……。

鐘の音……。もはや囁く。鐘の音は、憂わしげに、多少悲しげに、親しく、静かに、互に響き合う。そのゆるやかな声音につれて浮び上つてくる、夢の群が、過去のささまの夢が、消え失せた人々の欲望や希望や悔恨が。子供はそれらの人々を少しも知らなかったけれども、それでもなお昔は彼らに外ならなかった、なぜなら、彼は彼らのうちに存在していたから、また彼らは彼のうちによみがえつてきているから。幾世紀もの思ひ出が、今鐘の奏する音楽の中に震えている。数多の悲しみと数多の歓び！……そして、室の奥からでも、その鐘の音を聞いていると、軽い空気の中を流れゆく美しい音波や、自由な鳥や、風の暖かい息吹きなどが、すぐ眼の前を通りすぎるがように思われる。青い空の一部が窓にはほえみかけている。一条の日の光が、窓掛から滑りこんで寝床の上に落ちてゐる。子供が見馴れた小さな世界、毎朝眼を覚ましながら寝床から眺めるすべてのもの、自分のものにしようとして、多くの努力を払つて、それと知り始め名づけ始めたすべてのもの——彼の王

とは違っている。彼は必ずと人々を眺める。隣家のリナ婆さんは、彼の横に坐つて、意地悪そうな様子をしている。時とすると、祖父までが見連えるような様子になる。何だか薄気味が悪い。けれどそのうちには馴れてくる。できるだけの事をして退屈をまぎらそうとする。身体を揺すったり、首をまげて天井を眺めたり、顔をしかめたり、祖父の上衣を引っ張ったり、椅子につまつてる髪を調べたり、指先でそれに穴を開けようとしたり、鳥の声に耳を傾けたり、また頭が外れるような大あくびをする。

突然どつと音響がする。オルガンがひかれてるのである。彼は背筋にぞつと戦慄を感じる。ふり向いて椅子の背に頭をのせる、そしてごくおとなしくしている。彼にはその音響がさっぱり腑に落ちない。それが何を意味するのかわしも知らない。それはただ輝き渦巻いて、何にも見分けられない。けれども快いものである。もう一時間も前から、退屈な古い家の中で、ぎこちない椅子に坐つてゐること、その気持がどこかへ行ってしまう。鳥のように空中に浮んでゐる気がする。そして音響の大河が、いくつもの円天井を満たし、壁にはね返されて、会堂の隅から隅へ流れ渡る時には、自分の身体もそれに運ばれ、翼を搏つてあちらこちらと飛び廻り、その誘いに身をうち任せるの外はない。自由であり、幸福であり、日が輝いている……。彼はうつらうつらと居眠りをする。

祖父は彼に対して不満である。彼はミサに列して行儀が悪い。

*

彼は家にいて、両手で足を抱え床に坐つてゐる。靴ふきむしろを舟ときめ床石を川ときめたところである。むしろから出ると濡れてしまふと考へてゐるらしい。他の人たちが無頓着に室内を通るのに、彼は驚きまた多少気を悪くしている。彼はスカートの襷をつかまえて母親を引き止める。「このとおり水だよ！ 橋を通らねばいけないよ」——橋というのは、菱形の赤い床石の間に続いている小溝である。——母親は彼の言葉を耳にもかけないで通つてゆく。ちやうど戯曲作家が自作の開演中に勝手な話をしてる観客を見る時のように、彼はじれてゐる。

次の瞬間には、彼はもうそんなことは考へていない。床石はもう海ではない。彼は長々と床石の上にねそべつて、石の上に頭をつけ、自分で作り出した音楽を口ずさみ、涎を垂らしながら真面目くさつて親指をしゃぶつてゐる。床石の間にある割目に見入つてゐる。菱形のその列が人の顔のようにしかめる。眼にもつかないような小さな穴が、大きくなって谷になる。そのまわりにはいくつも山がある。一匹のわらじ虫がはつてゐる。それが象のように大きい。雷が落ちても子供の耳にははいらないだろう。

誰も彼に構つてくれない。彼は誰にも用はない。靴ふきむしろの舟、奇怪な獣の居る床石の洞窟、そんなものさへもうなくてすむ。自分の身体だけでたくさんだ。身体は何という興味の泉だろう！ 彼は自分の爪を眺めて大笑いしな

がら、幾時間も過す。爪はそれぞれ違った顔付をしていて、知ってる人たちに似通つてゐる。彼はそれらを、一緒に話さしたり、踊らしたり、殴り合はしたりする。——それからこんどは身体の他の部分！……彼は自分に属するものを残らず検査し続ける。なんとたくさん驚くべきものがあることだろう！ 不思議なものが実にたくさんある。彼は珍しそうにそれらのものに見とれる。

時々、そういうところを人に見つけられて、彼は手荒く抱き取られた。

*

時おり彼は、母親が向うを向いてる隙に乗り、家から外にぬけ出す。初めのうちは、後から追いかけて捕つてしまふ。後になると、あまり遠くへさへ行かなければ、一人で出かけるままだに放っておかれる。彼の家は町はずれにある。すぐ側から野原が続いてゐる。彼は窓が見える間は、時々片足で飛びながら、ちょこちょこ足をふみしめて、ちつとも立ち止まらないうで歩いてゆく。けれども、路の曲り角を通りすぎると、藪に隠されて誰からも見られなくなると、にわかに様子を変える。まず立ち止まつては指を口にくわえて、今日はどつちう話を自ら語ろうかと考へる。頭の中にいっぱい話を持つてゐるのである。もとよりその話はどれもみな似寄つたもので、また三四行で書き終えられくるくらいのものである。彼はそのどれかを選ぶ。たいていはいつも同じ話をとり上げて、それを

前日話し残した所からやりだすか、または違った趣向を立てて初めからやりだす。新しい話の筋道を考え出すには、ごく些細なことで充分である。ふと耳にしたひと言で充分である。

偶然の事柄からいつもたくさん思いつきが出て来た。垣根のほとりに落ちてるような(落ちていなければ折り取ってしまうのだが)、ちよつとした木片や折枝などから、どんなものも引き出されるかは、人の想像にも及ぶまい。それらのものは妖精の杖であつた。長い真直ぐなものは、槍になったり剣になったりした。それを打ち振りさえすれば、多くの軍隊が湧き出した。クリストフはその大将で、先頭に立つて進み、模範を垂れ、斜面を進撃して上つていった。枝がしなやかな時には、鞭になった。クリストフは馬に乗って、断崖を飛び越えた。時とすると馬が足を滑らした。すると馬上の騎士は、溝の底に落ちこんで、汚れた手や擦りむいた膝頭をきまり悪げに眺めた。杖が小さい時には、クリストフは管弦楽団の長となつた。彼は指揮者でありまた楽員であつた。指揮し、また歌つた。それから彼は、小さな緑の頭が風に動いてる數に向つてお辭儀をした。

彼はまた魔法使であつた。よく空を眺めながら大手を振って、大股に野の中を歩いた。彼は雲に命令を下した。——「右へ行け」——しかし雲は左へ動いていた。すると彼は雲をのしつて、命令をくり返した。自分の命令に従う小さなものでもありはすまいかと思つて、胸を躍らせながら横目であつた。しかし雲は平然と

左の方へ飛び続けた。彼は足をふみ鳴らし、杖を振り上げて雲をおどかし、左へ行けと怒つて命令をかけた。するとこんどは、雲はまったくその命令に服した。彼は自分の力に喜んで得意になつた。お伽噺で聞いたように、金色の馬車になれと命じながら花に触つた。そして実際にそういうことは起らなかったけれど、少し辛抱していればきつと起るだろうと思ひ込んでいた。彼は一匹のこおろぎを探し出して、それを馬にしようとした。こおろぎの背中にそつと杖をあてて、一定の呪文を唱えた。虫は逃げ出した。彼はその手手をささぎつた。しばらくすると、彼は虫の傍に腹ばいに寝転んで、じつと眺めた。もう魔法使の役目を忘れてしまつて、その憐れな虫を仰向けにひっくり返しては、それがもがき苦しむのに笑い興じた。

彼は自分の魔法杖に古糸を付けることを考えた。彼は真面目くさつてそれを河の中に投げこみ、魚が食ひに来るのを待つた。魚というのは普通餌もかぎもない糸を食うものではないといふことは、彼もよく知つていたけれど、しかし一度くらいは、自分のために、魚が例外なことをするかも知れないと思つていた。そしてすつかりうぬぼれのあまり、ついに溝板の割目から杖を差し入れて、往来の中で釣をするまになつた。心を躍らせて時々その杖を引き上げながら、こんどは糸が前より重いと考へたり、祖父から聞いた話にあつたように、何かの宝を引き上げるのではないかと想像したりした……。そういうことをして遊んでる最中に、ふしぎ

な夢心地と全くの忘却とに陥る瞬間があつた。周囲のすべてのものは消え失せてしまつて、もう自分が何をしているかをも知らず、自分自身をも忘れはてた。よくそんなことが不意に彼を襲つた。歩いてる時、階段を上りかけてる時、突然空虚が開けてきた。彼はもう何にも考えていないようだった。そして我に返つてみると、前と同じ場所に、薄暗い階段の中段に、自分を見出して呆然としてしまつた。それはあたかも、一つの生涯を過してしまつたようなものだった。——階段の二三段ばかりの場所です。

★

祖父はしばしば夕方の散歩に彼を連れていった。子供は祖父に手を引かれて、小股に足を早めながら並んで歩いた。彼らはいつとも、快い強い匂いのする耕作地を横ぎつて、小道を通つていった。こおろぎが鳴いていた。道にはだかつて横顔を見せてる大型の鳥が、遠くから二人の来るのを眺めていたが、間近になると重々しく飛び去つた。

祖父はよく咳払いをした。クリストフはその意味をよく知つていた。老人は何か話を聞かせたくてたまらなかつたが、まず子供の方からせがんでもらいたかつたのである。するとクリストフはきつと話をせがんだ。二人の気持は互によく通じ合つていた。老人は孫に対して深い愛情を抱いていた。そして孫のうちに熱心な聴衆を見出すことは、彼の喜びであつた。自分の生涯中の出来事や、古今の偉人の話を、彼は好ん

で語ってきかした。そういう時彼の声は、調子づいてきて情に激していた。押えきれぬ子供らしい喜びに震えていた。彼は夢中になって自らの自分の言葉に聞きとれてるらしかった。語らうとする時にあいにく言葉が見つからないこともあった。しかし彼はその失望に馴れていた。雄弁の発作と同じくらいに何度もくり返されたからである。そして話し始めればいつもその失望を忘れてしまったから、いつまでもそれをあきらめることができなかった。

彼がよく話すのは、レギュリヌスのことや、アルミニヌスのことや、リュートツォフの軽騎兵のことや、ケルネルのことや、皇帝ナポレオンを殺そうとしたフレデリック・スターブスのことであつた。異常な武勇談を口に乗せると、彼の顔は輝いてきた。莊重な言葉をやたらに敵めしい調子でしゃべるので、全く聞き分けられなくなるほどだつた。そして彼は、聴手が胸を躍らせる時分に少しじらしてやることを、上手なやり方と信じていた。彼は言葉をとぎらし、息苦しそうな風を装ひ、騒々しく鼻をかんだ。そして子供が、待遠しさのあまり息詰つた声で、「それから、お祖父さん」と尋ねると、彼の心は有頂天になつた。

その後、クリストフはだんだん大きくなって、ついに祖父の手段を見破るようになった。すると彼はもう意地悪くも、話の続きに対して冷淡な風を装ふことにつとめた。憐れな老人はそれに困らされた。——しかしまだ今のところでは、彼は全く話手の自由になつていた。そして彼の

血は、劇的な部分を聞くと特に躍り立った。もう何という人のことや、またそれらの手柄がどこでいつなされたのやら、あるいは祖父がはたしてアルミニヌスを知っていたかどうか、レギュリヌスというのはこの前の日曜に教会堂で見かけた人——そのわけは神のみぞ知る——ではないかどうか、そんなことは彼には分らなくなった。彼の心は、また老人の心は、勇ましい手柄話になると、あたかもそれをしたのは自分たちであるかのように、自慢の念にふくれ上つた。なぜなら、老人も子供もともに等しく赤ん坊だつたから。

祖父が勇壮な話の中途に、心に大切にしまつてゐる議論の一つをさしはさむ時には、クリストフはあまり嬉しくなかつた。それは主に道德上の意見であつて、正しくはあるがやや陳腐な一つの思想にたいいていつづめられるようなものだつた、たとえば、「温和は過激に優る」——「名誉は生命よりも尊し」——「邪悪なるは善良なるにしかず」などと。——そしてただ、それよりもずっと錯雜してるだけだつた。祖父は自分の幼い聴手の批評を恐れてはいなかつた。そしていつも心ゆく限り大げさな調子で口をきいた。少しもはばからずに、同じ文句をくり返したり、中途で言葉をとぎらしたり、また議論の途中でまごつく時には、思想の破綻をふさごうとして、なんでも頭に浮ぶことをでたらめに言つたりした。そして言葉を一層力強くなすためには、その意味と矛盾する身振りをさへ添えた。子供はごくかしこまって耳を傾けていた。そして、祖

父は非常に雄弁だが多少退屈だと、彼は考えていた。

二人とも好んで、ヨーロッパを征服したあのコルシカの偉人に関する伝説的な物語に、何度も立ち戻つていった。祖父は彼を知つてゐた。かつてはもう少しで彼と矛を交えるところだつた。しかし祖父は敵の偉さをも認めることができた。幾度となくそれを口にした。あれほどの人物がラインのこちらに生れるなら、片腕くらいくれてやつても惜しまなかつたらう。しかし運命はそうは許さなかつた。祖父は彼を讚美していたが、彼と戦つた——言い換えれば、まさに彼と戦おうとしたのだつた。けれども、ナポレオンがすでに十里ばかりの距離に迫つてき、それと会戦を期して進軍していた時、その小軍勢は突然狼狽し出して、森の中に潰走してしまつた。「謀叛だ!」と叫びながら誰もみな逃げ出してしまつた。逃走者を引きとめようとしたが駄目だつた、と祖父は話してきかした。祖父は彼らの前に身を投げ出して、おどかしたり涙を流して説いたりした。けれども逃走者の人波に巻き込まれて、翌日になると、戦場——と祖父は潰走の場所を呼んでいた——から驚くほど遠くに来てしまつていたのである。それでも、クリストフはいつもせきこんで、その英雄の勲功談に祖父を引き戻した。そして世界中を馬蹄にふみにじつた驚くべき話に魅せられてしまつた。眼の前に浮び出すその英雄は、無数の人民を後ろに隨えていた。人民らは敬愛の叫びを發していて、彼の合図一つで群がり立つて敵に飛びかか